

研究成果の紹介

イチゴ ‘あまクイーン’® 液体培養苗の特性評価

兵庫県が育成したイチゴ品種 ‘あまクイーン’ の液体培養苗[※]について、定植苗として用いた際の生育・開花・収量等の特性を評価した。2次育苗をすることで慣行苗に遜色ない生育を示し、慣行苗と比べ年内収量は同等以上、総収量は上回ることがわかった。

内容

兵庫県育成のイチゴ ‘あまクイーン’ (品種名「兵庫 I-3 号」) は 2015 年に品種登録された。第一実業(株)による液体培養苗の種苗生産が開始され、多くの生産者が栽培に使用し始めている。本品種の液体培養苗を親株としての特性は明らかだが、定植苗としての特性は未解明であった。そこで、定植苗として用いる場合の、育苗の有無による生育・収量特性を調査した。

128 穴のセルトレイで養生された液体培養苗を、育苗作業なしに本圃へ直接定植したものを「直接定植区」、トレイに鉢上げしたもの「鉢上げ区」、当センターでランナー増殖した苗を挿し苗し、育苗後定植したものを「慣行区」とし、生育・頂花房開花日・月別収量を調べた。

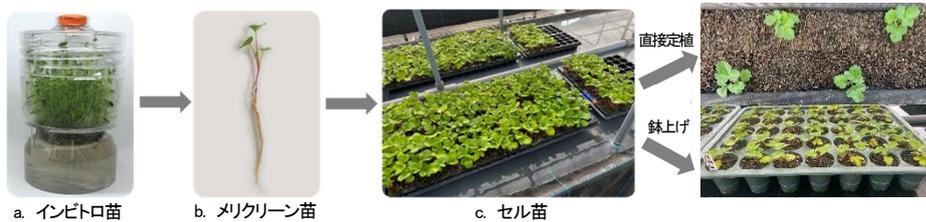


図1 液体培養苗定植・鉢上げまでの過程 (a, b は第一実業株式会社 HP より引用)

【直接定植区】
8/6 本圃へ定植

【鉢上げ区】
8/6 35 穴セルトレイへ鉢上げ、9/17 本圃へ定植

【慣行区】
8/16 35 穴セルトレイへ挿し苗、9/17 本圃へ定植

<省略可能な作業>
直接定植区: 親株養生・採苗・挿し苗・育苗
鉢上げ区: 親株養生・採苗

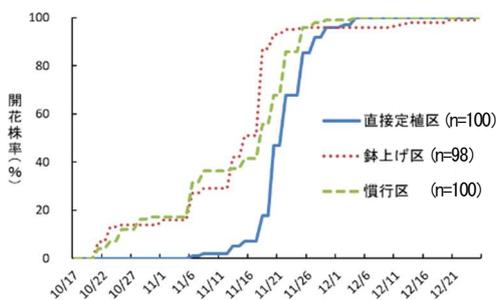


図2 頂花房開花株率の推移 (2024 年)

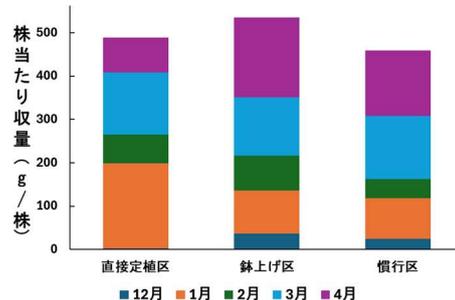


図3 月別の株当たり収量 (各区 6 株×3 反復、2024~2025 年)

その結果、直接定植区と鉢上げ区では慣行区に比べて葉柄長や小葉幅などで初期生育が劣る傾向が見られたが、定植 1 か月後には鉢上げ区は慣行区とほぼ同等の生育となり、定植 2 か月後にはいずれの区についても慣行区と同等の生育となった(データ省略)。頂花房開花日について、直接定植区では他の処理区よりも開花始期が遅れたが、開花株率の推移は鉢上げ区では慣行区と同様の傾向を示した(図2)。月別収量について、直接定植区では年内収量が無かったが、これは、直接定植すると、栄養成長から生殖成長への切り替えが遅れ、花芽分化が遅延したためと考えられた。一方、鉢上げ区では慣行区と同等以上の年内収量を確保でき、総収量も上回った。(図3)。

今後の方針

鉢上げ区の年内収量をより高めるための技術を開発すると同時に、直接定植をする場合でも年内収量を確保できるように、早期花芽分化による安定生産技術の開発についても検討する。

※液体培養苗：液体培地にて生長点培養を行った苗のこと(図1)。病原菌やウイルスの感染率が極めて低いことが特徴。

加藤もも (農産園芸部)